



Title	デンマークにおける留学交流についての一考察 : 短期交換留学制度を中心に
Author(s)	渡部, 留美
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2006, 10, p. 107-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマークにおける留学交流についての一考察

ー短期交換留学制度を中心にー

渡部 留美*

要 旨

本稿では、デンマークにおける留学交流の現状をインタビューや資料をもとに紹介する。前半部分ではヨーロッパの短期交換留学制度の中のデンマークの状況とデンマークの留学生受入れ状況について、後半部分ではデンマークの大学の国際化を支える部署やスタッフについて述べる。

【キーワード】デンマーク、留学交流、短期交換制度、大学の国際化、エラスムス・プログラム

1 はじめに

ヨーロッパの北部に位置するデンマーク王国（以下デンマークと略記）は、本土面積4万3,069km²（九州の約1.2倍）、人口530万人あまりの国家であり、規模からいうと、小国の部類に属するといっても過言ではない。日本人の多くにとっては、デンマークという国はそれほどなじみがなく、地図上でその位置を指し示すことさえ容易ではないかもしれない。デンマークにおける留学交流事情という、なおさら、その実態について詳しいものは少なくなるであろう。ところで、デンマークといえば、北欧という言葉から連想されるように、福祉国家の一つであるといえる。所得から高額税金が徴収されたり、25%という消費税を支払われる代わりに、医療や教育にかかる負担がほとんどない。また、デンマークは世界でも有数のODA（Official Development Assistance、政府開発援助）拠出国であり、2003年の統計では、16億4300万ドルを途上国に援助している¹。これは、GNI（国民総所得）比0.84%で世界第一位となっており、OECD（経済協力開発機構）が目標として定めている0.7%を上回る数少ない支援国である。

本稿は、2002年と2005年に筆者が現地で行なったインタビュー調査及び収集した各機関の資料を基に、デンマークにおける留学交流の現状について紹介し、

その特徴や問題点について論じることを目的としている。最初に、デンマークで留学生の多くを占める短期交換留学生について述べる。その際、EUが中心となって推進し、拡大しつつある短期交換留学制度を紹介し、その中におけるデンマークの留学生受入れ・送り出し状況をみる。EUにおける留学交流において、現在デンマークがどのような位置に置かれているのかについて述べる。次に、デンマークにおける留学生受入れの歴史や政府レベルの留学生受入れや国際化に対する考え方を紹介する。最後に、デンマークにおける大学の国際化について、国際交流業務を担当する部署の業務体制やスタッフについて述べ、留学生に対し、どのようなサービスが提供されているのか事例を挙げながら述べる。

2 デンマークにおける留学交流

2-1 エラスムス・プログラムとデンマークの交換留学生

デンマークにおける留学制度を検討するために、まず現在のヨーロッパにおける留学交流について概観しておく。現在のヨーロッパにおける留学交流のトレンドは、EU（European Union、欧州連合）が推し進めているエラスムス・プログラム（ERASMUS Programme、以下エラスムスと略記）であるといえる。EU加盟国の大学間協力と流動化を目指したこの

* 大阪大学工学研究科特任助手

プログラムは、1976年から行われていたジョイント・スタディー・プログラム (Joint Study Programmes) を引き継ぐ形で1987年に開始され、その後、大学と産業界間の協力を目的とするCOMETT、語学学習を奨励するLINGUA、中・東欧の大学との学生・教員交換であるTEMPUSの4つのプログラムが次々と設けられた²。

その後プログラムは改組が行なわれ、1995年からは、教育分野のSOCRATESと職業及び専門職のトレーニングLEONARDO DA VINCIの2つのプログラムになった。SOCRATES には、高等教育分野のERASMUS、学校教育分野のCOMENIUS、語学教育分野のLINGUAを始め、成人教育、遠隔教育などあわせて8つのプログラムが存在する。SOCRATES I 期 (1995～1999年) を経て、現在は、第II期 (2000～2006年) に入っている。

エラスムスがSOCRATESに含まれる体制になってから、プログラムの管理運営方法や助成金の申請方法が変わり、結果として、以下の二つについて大きく変化した。一つめは、責任の主体を学部から大学の中央組織に移すことによって、行政面での支援体制を改善し、個々の大学が一貫した政策を持つことが期待されるようになったこと、二つめは、留学をせず、自国に留まる9割以上の学生に対しても、教員の交流や多国間のカリキュラム開発を通じて教育・研究課程の中にヨーロッパの視点を取り入れることが奨励されるようになったことである (吉川、2003)。さらに、留学した学生が留学先の大学で単位を取得し、自国の大学の単位として認定してもらえる、ECTS (European Credit Transfer System、欧州単位互換制度) を設けたり、留学する学生にgrantと呼ばれる助成金を与えるなど、より多くの学生が気軽に交換留学ができるような制度になっている。

ここで、1987年から現在までのエラスムス・プログラムを利用して留学を行った学生 (以下、エラスムス学生と略記) の移動について紹介しよう³。1987年の開始から2003/2004年までに2199の高等教育機関を約120万人の学生がエラスムスを利用し、留学を行った。1987/88年には、わずか3,244人しかこの制度を

利用していなかったが、2003/2004年には1年間で約13万人の移動があった。参加国も増えつづけ、2005年現在の参加国は、EU加盟国25カ国のほか、EEA (European Economic Area) Countries 3カ国 (アイスランド、リヒテンシュタイン、ノルウェー)、準会員国 (ルーマニア、ブルガリア、トルコ) 3ヶ国を合わせた31ヶ国である。今後も参加国・留学生数共に拡大していくことは確実であろう。

次に、エラスムス学生の送り出し上位国と受入れ上位国を、2003/2004年の統計より表1と表2にまとめる。国の規模も関係しているであろうが、フランス、スペイン、ドイツといった国々の交換留学が盛んであることがわかる。

表1 エラスムス学生送り出し上位国

順位	国名	人数
1	フランス	20,981
2	ドイツ	20,688
3	スペイン	20,034
4	イタリア	16,829
5	イギリス	7,539
6	ポーランド	6,276
7	ベルギー	4,789
8	オランダ	4,388
9	フィンランド	3,951
10	ポルトガル	3,782

出典) EU統計より筆者作成、以下同様

表2 エラスムス学生受入れ上位国

順位	国名	人数
1	スペイン	24,076
2	フランス	20,275
3	ドイツ	16,874
4	イギリス	16,627
5	イタリア	12,743
6	オランダ	6,733
7	スウェーデン	6,082
8	フィンランド	4,932
9	ベルギー	4,513
10	ポルトガル	3,766

エラスムスが導入される以前は、エラスムスによってヨーロッパを世界の大学から閉ざしてしまうことが危惧されていた。しかし実際には、エラスムスを始めとするEUプログラムが高等教育にもたらした効果は

絶大であった。

ギ(1997)は、その効果を「1. ヨーロッパ間/国際間の協力を辺境的なものから主流の活動へと動かしたこと、2. 欧州連合の次の教育施策の基礎を築いたこと、3. ヨーロッパの高等教育を世界の知るところとした」(p.65)という三点にまとめている。これらのプログラムはヨーロッパ地域外でも注目を集め、世界の他の地域における同様のプログラム導入のよいきっかけとなったのである。

では、デンマークの状況はどうであろうか。デンマークにおけるエラスムス学生の移動数を表3に示す。エラスムスに関しては、デンマークは送り出し数よりも受入れ数のほうが多くなっている。デンマーク人学生の送り出し国は、2003/2004年の統計では、多い順に、イギリス(330人)、ドイツ(302人)、フランス(260人)、スペイン(259人)、オランダ(117人)である。また、受入れ留学生の出身国は、2003/2004年の統計では、多い順に、スペイン(573人)、フランス(500人)、ドイツ(410人)、ポーランド(362人)、イタリア(357人)となっている。

表3 デンマークにおけるエラスムス学生

年	送り出し	受入れ
1987/88	57	不明
1988/89	189	不明
1989/90	417	不明
1990/91	729	不明
1991/92	950	619
1992/93	1,282	845
1993/94	1,561	1,264
1994/95	1,771	1,247
1995/96	1,930	1,332
1996/97	1,730	1,300
1997/98	1,795	1,605
1998/99	1,751	1,931
1999/2000	1,764	2,158
2000/01	1,750	不明
2001/02	1,752	不明
2002/03	1,845	不明
2003/04	1,686	3,396

また、エラスムス以外に、ヨーロッパ以外の国々との協定校提携によって、アメリカ合衆国やアジア諸国との短期交換留学も増加している。例えば、2000/

2001年のオーフス大学(後に詳述)の統計では、送り出し数では多い順に、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、ノルウェー、スペインとなっており、また、受入れ数では多い順に、スペイン、イタリア、ドイツ、フランス、ノルウェー、アメリカとなっている。デンマークの多くの大学では、英語による授業が開講されており、それがエラスムス学生の受入れ数の増加やヨーロッパ以外からの交換留学生の受入れにつながっていると考えられるが、それについては後ほど詳述する。

2-2 デンマークの留学生受入れの歴史的過程

ここまで短期留学形態の代表であるエラスムス及び短期交換プログラム留学生について概観したが、その他の留学生も合わせたデンマークの受入れ数はどのくらいであろうか。2002年の報告によると、デンマークには毎年3~4,000人の外国人留学生(3ヶ月以上滞在)が来ているとされている⁴。上述したエラスムス学生が3,396人であるから、更にそれ以外の短期交換学生を含めると、大多数は短期交換学生であることが分かる。アメリカ合衆国やドイツ等、他の留学生受入れ大国と比較すれば圧倒的に少ないといえるだろう。

では、デンマークはデンマークの大学に正式に在籍し、学位取得を希望している者への留学の道を閉ざしているのだろうか。その答えを探るために、ここでデンマークの留学生受入れのこれまでの歴史を見てみる。デンマークにおける留学生の受入れはいつから始まったか定かではないが、留学生や研究者の受入れの歴史は長く、また過去十数年間で、国際的なプログラムが外国の機関との協力の下、劇的に増加したと言われている⁵。これはエラスムス・プログラムを始めとしたEUの留学交流の実施による増加であると推察される。筆者が見つけた中で最も古い資料に、1966年にデンマーク留学生委員会(The Danish International Students Committee)によって発行されたガイドブック“The foreign student in Denmark”⁶がある。つまり1966年の時点でデンマーク留学希望者が少なからずいたことになる。これをみると、第一ページ目には、留学というものは実りの多い経験になるだろうが、費用がかかること、教育システムが異なること、

デンマークで取得した単位が母国で認められにくいこと、とデンマーク留学の難しさが挙げられている。そして、以下の条件の何れかに当てはまるのであれば留学を奨励すると述べている。すなわち、勉強しようと思う分野が自国よりデンマークのほうが優れていること、デンマークに関する研究であること、家族がデンマークに住んでいる等デンマークでしか勉強できない状況にあること、の三点である。また、言語に関しては、デンマーク語で授業を行なうのでデンマーク語の能力が必要であることが書かれている。つまり、1966年当時のデンマークは留学生受入れを積極的に行っていたとはいいがたい。

現在でも、学位取得目的の留学生の大半は北欧諸国出身であるのは事実であるが⁷、状況は変化しつつある。The Danish Rectors' Conference Secretariat (以下、デンマーク学長協議会と呼ぶ) という組織⁸が、デンマークへの留学希望者に対し、ガイドブック *University Education in Denmark* を発行し、デンマークの高等教育機関や、デンマークの教育システムについて紹介し、情報を提供している。そのガイドブックの冒頭には、教育言語はデンマーク語であるが、多くのコースや特別なプログラムが英語で施されており、特に、博士課程等の高いレベルの教育 (advanced studies) についてはほとんどが英語で可能であると書かれている。

2-3 デンマーク学長協議会報告書にみるデンマークの高等教育の国際化に対する考え

1996年、デンマーク学長協議会がデンマークの高等教育の国際化についての討論の報告書を発表した⁹。A4で56ページにも及ぶ膨大な報告書には、デンマークの国際化に対する建設的な提言がなされている。資料的にはやや古いが、ここで概要を紹介する。

章立ては、第1章:序論、第2章:国際化の枠組みと論点、第3章:国際化に関する組織の体制、第4章:国際教育市場、第5章:高等教育機関の国際化戦略についての枠組み、第6章:デンマークの高等教育機関における労働状況、第7章:高等教育機関の戦略展開、第8章:学生の移動とリクルート、第9章:教員の移動とリクルー

ト、第10章:カリキュラム展開、第11章:結論 となっている。デンマークの大学の国際化というのは、受入れと送り出し、それも学部学生だけでなく、教員や博士課程の学生、博士学位取得後教育の移動があつて成し遂げられるということが前提となっているようである。第3章では、高等教育機関にとって、今後はヨーロッパだけではなく、米国やカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、日本等と連携して国際化を推進する必要があると述べている。第8章では、送り出し学生のほうが受入れ学生よりも多いことが指摘されている。

また、現在のデンマークにおける留学交流の問題点として、以下の点が挙げられている。一点目は、送り出し学生の留学先の希望が英語圏に偏りすぎていることである。二点目は、どのような言語で教えるかということについてで、優秀な学生を受入れるためには、英語の授業実施が必要であること、加えて外国人スタッフによる英語以外の外国語での授業も必要であることを説いている。しかし、英語による授業は、母語であるデンマーク語での授業よりも当然内容面において質が下がることが予想されるため、デンマーク人学生不満を生むだろうと分析している。三点目は、送り出し学生が外国で取る単位がデンマークでは認められにくく、それがデンマーク人学生の留学意欲を消極的にしていると述べている。四点目は、学位の問題で、外国人学生の学位に対する要求は増しているが、それには簡単には答えられていないことが指摘されている。これは、デンマークの高等教育システムと外国のそれとが異なるためであり、この違いが留学交流の妨げになっているのだと結論づけられている。五点目は、送り出し学生の奨学金・助成金等の資金援助が少ないことである。

一、三、五点目の自国の学生の送り出しに関しては、先に見たように、留学先国が英語圏 (イギリス等) に偏っていたり、人数が伸び悩んでいたりとということがエラスムスにおける学生移動においてもみられる。また、二点目と四点目の外国人留学生の受入れに関しての、使用教育言語に関する問題、学位授与に関する問題は、いずれも日本の留学制度においても同様に問題

である。後述するが、これらの問題点の克服が高等教育の国際化のカギとなっている。

2-4 留学希望者への情報提供機関の発足

このような状況のなか、2000年7月、留学交流に関する業務を行なう組織としてデンマーク教育省の外郭団体Cirius（シリウス）が設置された¹⁰。Ciriusでは、様々な留学交流に関する情報提供や支援を行なっているが、そのホームページには、英語で学位取得が可能な大学のコース紹介が掲載されている。さらには、英語だけではなく、フランス語やドイツ語で教授されているコースもあるといい、これらのコースは全部で1,000以上に及ぶという。最近でこそ英語で学習・研究が可能なコースも散見するが、ほとんどの課程において日本語能力を最低の条件としている日本政府や大学とは考えが異なっていることは興味深い。以上のことから、約35年以上前と比較して、デンマークへの留学希望者への道は大きく広がったといえ、英語プログラムの充実等、解決を図ろうとしていることが読み取れる。

3 大学の国際化を支える部署とスタッフ

2-2で紹介したガイドブック *University Education in Denmark* によると、デンマークの各大学には「国際交流課が設置され、スタッフが外国人のために留学に関する様々な情報を提供している」と説明されているが、実態はどうであろうか。ここでは、首都に存在するコペンハーゲン大学（Kobenhavns Universitet）¹¹とそれに次いで規模が大きく、在籍者数2万人以上を擁するオーフス大学（Arhus Universitet）¹²の事例から紹介したい。前項では、デンマークは海外からのデンマークの大学への留学希望者へ門戸を開きつつあると述べたが、筆者が訪問した2大学では、交換留学生に関する業務を行う部署は存在するが、学位目的の留学生に対する業務を特別に行う部署は存在しなかった。そこで、ここでは、交換留学生に絞り、彼らに対するサービスやサポート体制がどのようなになっているのか、またスタッフの業務について紹介するにとどめる。

3-1 コペンハーゲン大学の事例

コペンハーゲン大学には、International Student Centre という国際交流センターが設置されており、キャンパスの大半がある郊外からは離れているが、市の中心部という便利な場所にある。ここでは、交換学生の受入れと送り出しの業務を行っている。2005年現在、大学には、約1,000人の交換学生がいるが、増加傾向にあり、来期には1,200人くらいになるであろうと予想している。受入れ留学生のためのプログラムとして、セメスターの始まる3週間前に、デンマーク語・文化講座が受けられるコースを用意している。午前中はデンマーク語を勉強する時間に充てられるが、午後は文化的プログラムや施設巡り等社会見学に参加できる。また、メンター（Mentor）と呼ばれるチューター制度を持っており、留学生と同じ分野を専攻しているデンマーク人学生が空港や駅まで出迎え、寮まで付き添い、種々の手続にも同行するという、留学生にとってはありがたいシステムである。担当者は、「これだけ留学生が多いと、一人一人をケアするよりもメンターをトレーニングしたほうが早い」と考えており、実際にメンターには業務内容について研修を実施しているということであった。

受入れ留学生に関する業務の中で一番の問題は宿舍の提供である。現在は、1,000人分何とか確保しているが、寮だけでなく一般のアパートも借り上げている。現在建設中のキャンパス内にある寮では、550室分の1割を留学生用に確保するという。

国際交流センターでは、常勤スタッフの他に、デンマーク人学生を4人雇っており、送り出し業務の手伝い、カウンセリング、窓口業務に関わっているという。その他、交換学生も雇用しているという。

3-2 オーフス大学の事例

次にオーフス大学の事例を紹介する。オーフス大学には、1989年に設置された短期交換学生に関する業務を行なう、国際交流課（International Secretariat）が存在する。組織体系は、課長（Director）と2人の副課長（assistant head）が中心となり、業務を統制しており、それぞれの副課長の

下に秘書やインターン、アルバイト学生 (student helper) がつくというピラミッド型をなしており、スタッフの合計は18人である。業務内容は外国人留学生のオーフス大学への受入れと、オーフス大学所属学生の外国の大学への送り出しの2本柱で、2人の副課長がそれぞれ受入れと送り出しを担当している。受入れ業務は、各学期が始まる一ヶ月前に3週間かけて行なわれるデンマーク語・文化講座¹³の計画・実施、宿舍の手配、メンター制度の運営、海外の交換留学提携校との連絡等である。送り出し業務は、デンマーク人学生向けの留学紹介、留学フェア (International Day) の実施、海外の交換留学提携校との連絡等である。通常の窓口 (受付) 時間は10:00~12:00 (木曜日は10:00~16:00) に限っており、相談や質問、諸手続きに来る学生には基本的にアルバイト学生が対応している。

国際交流課の二人の副課長は、専門職員である。このポストはそのような専門性をもった者を雇用の対象としており、彼らは大学で英語と国際関係を専攻したという。二人は、計画の提案・実施等においてあらゆる権限を持っている。受入れ担当者は年に平均30日ほど海外出張を行っている。ここ1年間では、アイスランド、アメリカ合衆国、日本、ポルトガルに出かけた。これらの出張の内容は、協定校の締結や国際教育交流担当者のための会議¹⁴への参加である。担当者はヨーロッパ以外の国にも関心が高く、オーフス大学人文科学部東アジア学科¹⁵の学生に留学の機会を与えるため、日本の四つの大学と協定校の提携を結んでおり、さらには中国の大学との提携も計画中であるという。一方、送り出し担当者も同様に、海外出張に出かけることもあるが、その専門性を生かし、デンマークの国際交流担当者のためのセミナーで講師を務めたりもしている。今後もずっとこの職場にいるつもりはなく、もっと視野を広げるために、国際関係の仕事をしたいと考えている。この点において、デンマークの留学生担当者が専門職化されていることは明らかである。

4 おわりに

以上デンマークの留学交流について概観した。デン

マークの留学交流は、約18年前に導入されたエラスムスの影響が大きく、それは現在における外国人留学生数のエラスムス学生の占める割合からみても分かる。また、その波に乗りながらも自国の高等教育の国際化を目指していることが窺われる。外国人留学生受入れ数についても、表3を見る限り、その数は確実に増加しているといえ、今後も増え続けるであろう。現在の留学生数が少ないと見るよりも、むしろ、今後デンマークにおける留学生数は増加し、留学生受入れに対する考えや政策も積極的になるとみるべきである。以下、デンマークにおける今後の留学交流にとって、その活性化を促す材料となるものを提示する。

第一にあげられるのが高等教育のシステムである。デンマークの高等教育は就学年数や単位・学位取得などの面において米国や他のヨーロッパ諸国と必ずしも同じではない (ギ、1997、ヘルマンス・グレゲルセン、2000)。これはどの国にも言えることであるが、この教育システムの違い、不均衡をどのように克服するかによって、留学交流の質・内容も違ったものになるであろう。これは日本における留学交流を促進する要因でもあると思われる。

また、留学生を受け入れる側にとって、いかにして優秀な留学生を集めるかということが重要視される。この問題についてデンマーク学長協議会では、国際的な学士・修士プログラムを作ることが一つの案として出されている。デンマークは修士課程が2年で、これは他のアングロサクソン系ヨーロッパ諸国は1年から1年半で修士がとれることから、不利な点として挙げられている。他国の教育体系を考慮に入れたカリキュラム作りが今後は必要になると考えられる。

第二に高等教育機関のスタッフとプログラムの充実である。コペンハーゲン大学やオーフス大学の国際交流担当部署では、専門職のスタッフが配置され、きめの細かいサービスが提供されていることは申し分ない。しかし、国際交流課の業務は、交換学生 (exchange student) や何らかの協定プログラムに組み込まれている学生を対象としている。つまり、協定を結んでいない大学から来る学生 (guest student) や学位取得目的の学生のための体制ではないのである。彼らはオー

フス大学国際交流課が行なったアンケート¹⁶において、宿舎探しを自分でしなければならないこと、メンターがいないことについて不満の回答を寄せていた。このような事態に対し、送り出し担当者は、「ここでは、交換学生のみへの対応しかしていないが、今後他のタイプの学生に対しても同様のケアが必要になってくるであろう」と述べ、国際交流課の体制改善の必要性を感じていた。さらに、デンマークでは、2006年8月より、交換学生やEU諸国の学生等を除いて、留学生から授業料を徴収することになった。学位目的の留学生に対する何らかの体制が必要となってくるであろう。

第三に使用する教育言語についてである。これはデンマークだけではなく、エラスムス・プログラム全体の問題ともなっているのだが、留学先の不均衡の問題は、語学（主に英語）に関する質の問題と関係している（坂本、1991）。つまり、学生は、英語圏への留学を希望する傾向にあるが、全ての学生が希望する国へ留学できるわけではなく、語学力不足の学生は、第二、第三希望の留学先へ留学することになる。デンマークに留学している学生の中には、このような背景を持ったものも少なくない¹⁷。

デンマークでは、英語が初等教育の第4学年から必修となっており、大学で使用するテキストの半分以上が英語で書かれたものである。また、テレビ番組の約半分以上が英語圏で制作された番組を放送している（伊東、2003）。このような事情、つまり、外国語教育の充実、デンマーク語で作られたオリジナルのテキストが少ないという状況は、デンマーク人の高い英語能力の保持に繋がっている。それは小国の持つ強みであるとも言え、そのことが大学における英語での授業の実施を可能にしている。留学生受入れのために英語の授業を前面に押し出すことは、現地人との交流の阻害要因になり、江淵（1991）のいう「分離主義」に当たると考えられるものの、それでもなお、留学生受入れの門戸が大きく開かれていることには変わりはなく、海外からの留学生のプル要因になっている。

さらに現在は、様々な形の交換留学プログラムが増え、留学生が多様化している。当然英語能力の十分でない学生も増えるであろう。このような状態で留学生

を受入れ続けると、授業内容レベルの低下という結果を招きかねない。オーフス大学国際交流課でもその問題を認知しており、その対策として、学期が始まる前の短期集中講座で英語のコースを導入することが決定されている。様々な国の学生が交流することは、大学の国際化という面で効果的ではあるが、弊害も伴うことを考慮しなければならないであろう。

以上、デンマークにおける留学制度や大学の国際化について概観した。デンマークと日本の留学交流事情は、教育システムや留学生の身分等、相違点もある反面、語学面、学位授与等の共通する問題点を抱えていることが見受けられた。また、大学の国際化、他国の学生に対する教育の必要性という基本的な理念は両国で一致しているといえるであろう。本稿では、日本の現状との比較が十分にできなかったが、それは今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆のための調査は、2002年度神戸大学国際文化学会助成金および、科学研究費補助金基盤研究(A)(2)「大学国際化の評価指標策定に関する実証的研究」(研究代表者：古城紀雄、平成16～17年度、課題番号：16203039)の補助金を受けて可能になった。末筆ながら記して謝意を表します。

注

1. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/>より。
2. それぞれの略は、ERASMUS: The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students、COMETT: The European Community Action Programme for Education and Training for Technology、TEMPUS: Trans-European Mobility Scheme for University Studiesである。LINGUAについては、プログラム名そのままである。
3. http://europa.eu.int/comm/education/index_en.htmlより。
4. Cirius (<http://cirius.dynamicweb.dk/Default.asp?ID=1>)

の報告書による。

5. *University Education in Denmark*, Secretariat of the Danish Rectors' Conference, 2001, p.6.
<http://www.rks.dk/sider/publikationer/english/uni-edu-den.pdf>
6. 当時、コペンハーゲン大学に事務局が置かれており、このガイドブックはデンマーク教育省の助成金によって出版された。
7. 筆者がコペンハーゲン大学国際交流センターで行ったインタビューより。
8. デンマークにある11の研究大学（現在は12）の学長が組織している団体。科学技術革新大臣の職の一部であり、そこから資金を受けて運営している。大学の教育について国内外に情報を提供したり、調査をおこなったりしている。
<http://www.rks.dk/>
9. *Internationalization of higher Education in Denmark*, The Danish Rectors' Conference (Rektorkollegiet)
<http://www.rks.dk/sider/publikationer/engpublica.html> よりダウンロードできる。
10. Cirius は、Danish Centre for international Cooperation and Mobility in Education and training であり、デンマークへの留学希望者に対し、大学や奨学金、生活面での情報の提供を行なっている。また、デンマーク人の外国留学の情報も同様に提供している。
11. 2005年3月に行ったインタビューによる。
12. 2002年10月に行ったインタビューによる。
13. Denmark Today と呼ばれるプログラムで、デンマーク語講座や施設の見学、デンマークに関する講義、交流活動が組まれている。2002年8月には、143人の参加者があった。
14. アメリカで開かれる NAFSA (Association of International Educators、国際教育者協会) やヨーロッパで開かれる EAIE (European Association for International Education、欧州

国際教育協議会) の会議が含まれる。

15. 日本語専攻と中国語専攻がある。
16. 2002年8月に行なわれた語学文化講座 (Denmark Today) 終了後のアンケートより。
17. 実際、筆者が何人かの交換留学生に聞いたところ、イギリスを留学先として希望していたが、学内選考で選ばれなかったため、仕方なくデンマークに来たと回答した者もいた。

参考文献

- 江淵一公 (1991) 「留学生受入れの政策と理念に関する一考察—主要国における政策動向の比較分析から—」『広島大学大学教育センター大学論集』第20集、pp. 33-68
- ギ・オグ (1997) 「ソクラテスからエラスムス—ヨーロッパにおける大学間協力と流動の新しい動き—その1」『IDE現代の高等教育』、388号、pp. 75-79
- ギ・オグ (1997) 「ソクラテスからエラスムス—ヨーロッパにおける大学間協力と流動の新しい動き—その2」『IDE現代の高等教育』、389号、pp. 61-67
- ヘルマンズ、ジェニー、グレゲルセン、ボー (2000) 「ヨーロッパの留学生—あなたは何と出会うのだろうか?—」『留学交流2000年11月号』、ぎょうせい、pp. 2-6
- 伊東武彦 (2003) 「ソクラテス計画とEU各国の外国語教育政策」『大妻女子大学紀要文系』第35巻、pp. 27-38
- 坂本昭 (1991) 「第18章 ユーロッパ共同体の留学政策—その目的と可能性」『世界の留学』権藤与志夫編、東信堂、pp. 268-282
- 吉川裕美子 (2003) 「ヨーロッパ統合と高等教育政策—エラスムス・プログラムからボローニャ・プロセス—」『学位研究』大学評価・学位授与機構研究紀要、第17号pp. 71-90